

C-62 和服構成の諸要因(初3)交織地単衣長着の縫い目強度と着装による変化
大妻女子大学家政 木野内清子 金谷喜子 笹本信子 ○呑み呑佐子

目的 前回の交織地単衣長着の着用実験に引続き、毛100%の単衣長着実験着を加えて、着装による変化を考察し、今後の被服構成の参考としたい。

方法 実験着はA、交織(ウール65%, ポリエステル35%)B、毛(100%)の着尺地の単衣長着 各3枚を前回使用の実験着寸法で、縫い方3種類を設定して製作し、下半身頃にタテ・ヨコ 5cm間隔にしろしをほどこした。実験は、ほぼ同体型の被験者9名が実験着と交換して、総計90時間とさらに続けて180時間着用し、その着用前後の寸法を計測し、①布の伸縮・変形 ②縫い目の変形も、着用時間と材料の差において比較検討した。

結果 ①については実験着Aの90時間着用後の変形(49年度実施)に比較し、実験着Bの変化は少なく、材料自体の性能の影響が考えられる。即ち、幅寸法における腰部の僅少の伸びは前回結果に同じであるが、下前身頃にみられた着装による斜め引き上げの影響による変化はすくなく、変化が全体にばらついている。また実験着A・Bの90時間に引続く180時間着用後の変化は、A・Bとも布の回復力低下の影響からか腰部にふくらみの変化がみられたが、AよりBの変化は少ない。②については各縫い目とも縫い目強度、大のミシン縫いは布地への影響が大であり、手縫い目は縫い糸の変化が大きく布地への影響は少ない。また90時間後ではA・Bとも、腰部、すそにおけるきぜの崩れや縫い目割れなどの変化は僅少であったが、180時間後の手縫い目のすそは、糸切れ寸前の状態もみられた。